登場人物

藤野香澄（５・１１・２３・２８）会社員

丹波北斗（２４・２９）香澄の彼氏

広尾浩成（１５・２１・３８）不動産勤務

凛（２８）　香澄の友人

松本（２９）不動産勤務

女性店員　不動産勤務

浩成の同級生

女子高生

女性アナウンサー

タレント１・２

芸人

香澄の上司

男性アナウンサー

モデル

俳優

コメンテーター

○香澄の夢・広尾家・リビング（１７年前）
整理整頓が行き届いたリビング。
家具や間取りがぼやけて輪郭が曖昧。
リビングのドアを開ける藤野香澄（１１）だけはっきりしている。
香澄「ただいまー」
ソファーに座ってゲームをしている広尾浩成（２１）、顔がぼやけている。
浩成「お前の家じゃねーんだけど」
浩成の声とゲームの音もこもっていて聞こえにくい。
香澄「ほとんど私の家みたいなものだし」
香澄、ランドセルを下ろす。
浩成「ふーん。じゃあ家に帰ってきたらやることあるよな」
香澄「？」
浩成「宿題だよ。しゅ、く、だ、い。遊ぶ前にやることやれよ」
香澄、目を伏せて、
香澄「学校でやってきたからいいの」

ソファーに座る香澄、テレビをつけてドラマを流し見る。

テレビもぼやけた画面。

香澄「ねえこうちゃん」

浩成「あ？」

香澄「いつになったらこうちゃんのお嫁さんになれる？」

浩成「何だよガキが偉そうに。コーヒー飲めるくらい大人になってから言ってくださーい」

香澄「来年から中学生だから大人です～」

浩成「俺は社会人だからもっと大人です～」

香澄「留年しないの？」

浩成「しねーから。俺の優秀さ舐めんな」

香澄「……追いつくまで待っててよ」

浩成「無理だろ」

香澄、浩成を見る。

浩成、ゲーム機から顔を上げない。

香澄「私が持ってる物全部捨ててもいいくらい、こうちゃんのこと好きだよ」

浩成「……あっそ」

窓から桜が舞い込んでくる。

ソファーに座っている二人の後ろ姿。

ゲームの音とドラマの音声だけ部屋に響いている。

ドラマの音声が急にはっきり聞こえる。

女子高生の声『ねえねえ、このおまじない知ってる？　好きな人が眠っている間に―』

セリフとアラームの音が重なる。

○アパート・香澄の部屋・現在（朝）

１ＬＤＫの部屋に鳴り響く携帯のアラーム。

アラームを止める香澄（２８）、体を起こしてベッドから出る。

×　×　×

香澄、朝食を食べながらテレビを見ている。

恋愛相談のコーナー。

タレント二人と芸人と女性アナウンサ

ーがピンク色に飾られたセットに居る
女性アナウンサー、手紙を読み上げる。
女性アナウンサー『元彼が置いていったパジ
ャマが捨てるに捨てられません。もう未練
はないのですが、次に進むために吹っ切る
きっかけを下さい。だそうですけど』
芸人『わかるー。パジャマって匂いが染みつ
いててなんか捨てられないんだよね～』
タレント1『香水で好きだった人を思い出し
たりしますよね！』
芸人『あるある～。でも大体失恋した相手っ
て言うね（笑う）。香りって強いよね、顔も
思い出せないけど～とかあるじゃん？』
タレント2『人って声から忘れていくらしい
ですよ』
芸人『えーっそうなんだー！』
タレント1『じゃあ好きだった人の声を突然
聞いたらどうなるんだろう』
芸人『そりゃもう脳みそグラッグラでしょ、
思い出パンチ真正面からくらってんだから。

人生変わっちゃうよー』

香澄、ココアを飲む。

タイトル「可否」

○会社・経理課・オフィス（朝）

香澄、請求書を見ながら電卓を打つ。

凜（２８）、椅子に座ったまま香澄の隣へ滑ってくる。

凜「（小声）香澄」

香澄、顔を上げる。

香澄「ん？」

凜「（小声）丹波さんが呼んでる」

凜、廊下を指さす。

香澄、廊下を見る。

廊下に居る丹波北斗（２９）、小さく手を振る。

○同・廊下（朝）

香澄、丹波の元へ。

香澄「どうしました？」

丹波「お土産を渡しに」
丹波、お菓子を差し出す。
丹波「同期が北海道に出張してきて。藤野さん、甘いもの好きでしょ？」
香澄、チョコレート菓子を見る。
香澄「ありがとうございます。ありがたく頂きます」
丹波「（嬉しそうに笑う）あ、そうだ。レストラン予約できたから。また夜に迎えに来るね」
香澄「はい」
丹波、うきうきで帰っていく。
香澄、見送る。
後ろからのぞき見していた凜。
凜「これはプロポーズ来るか？」
香澄、驚いて振り返る。
香澄「ただの記念日のご飯だよ」
凜「いやいや可能性あるでしょ」
香澄「ないって。（ふと）こういう時ってプレゼント用意した方がいいのかな」

凜、丹波が帰った方を指さして、
凜「あっちは何かしら用意してるだろうね。
合鍵でも渡せば？」
香澄「適当に言ってない？」
凜、「バレたか」という顔。
笑う二人、室内に戻る。

○同・経理課・オフィス（朝）
椅子に座る香澄、お菓子をポケットに
入れて電卓に手を乗せる。
香澄M「子供のころからずっと同じ夢を見る」
香澄、請求書を見て電卓を打つ。
香澄M「何度も何度も。同じ夢を」

○同・食堂
香澄、端の席で凜を待っている。
凜、カレーを持ってやってくる。
凜「お待たせ」
凜、向かいの席に座る。
香澄「おかえり、今日はカレーにしたの？」

凜「そ、うどんもあったけど飛ぶの怖いし。
カレー人間二号になりたくないから」
香澄「それってただの噂でしょ？」
凜「ちがうしー」
香澄、お弁当を広げる。
お昼を食べ始める二人。
テレビで恋愛特集が流れている。
女性アナウンサー『初恋が叶う確率ってご存じですか？　それはなんと百人に一人なんです！』
凜と香澄、テレビを見る。
街頭インタビューの映像。
凜「最近こういう話多いな。バレンタイン近いから？　寒いと人肌恋しくなるせい？」
香澄「どっちもじゃないかな」
凜「香澄って丹波さんと付き合ってどのくらいだっけ？」
香澄「（えっと）三年かな」
凜「そっかあ、もうそんなか」
香澄「凜も付き合って長い彼氏居るよね」

凜「長いって言ってもあっちが日本国内駆け回ってるから結果的に長くなってるだけだよ。今どこだったかな、九州？」

香澄「忙しいね。寂しくなったりしない？」

凜「ないない。慣れよこんなの、就職してからずっとだから。（はっと）待ってヤバイ、私の初恋アイツだ」

香澄、「おっ」という顔でテレビを指さす。

凜、頷く。

香澄「百分の一だ」

凜「百分の一〜」

くすくす笑う二人。

凜「香澄は？」

香澄「ん？」

凜「初恋、どんな人だった？」

香澄「……」

一瞬浮かぶぼやけた浩成。

香澄「……声が、すごく好きだったな」

凜「声？」

香澄、目を伏せて、

香澄「もう忘れちゃったけどね」

凜「まあ大体そうだよね～」

○文具店・店内

ボールペンが並ぶショーケースの中を眺める香澄、ふと足を止める。

視線の先に星の刻印が彫られた銀色のボールペン。

店員「よろしければお出ししましょうか？」

香澄「いいですか？」

店員「ぜひ、持った感触や書き心地など試してみてください」

ケースを開ける店員、ボールペンを取り出して香澄に手渡す。

香澄、ボールペンを見て満足そうに頷く。

香澄「贈り物にしていただけますか？」

店員「かしこまりました」

店員、包装紙の一覧を出す。

香澄、包装紙を選んで会計を済ませる。
鞄を開く香澄、鍵に付いているウサギのストラップを見て止まる。
香澄M「嘘を吐いた」
香澄、財布をしまって鞄を閉じる。
香澄M「忘れられない恋がある」

○回想・広尾家・玄関（２３年前）
引っ越しの挨拶をしている香澄の両親。
香澄（５）、母親の足に隠れながら浩成（１５）を見ている。
香澄以外白くぼやけている。
視線に気づく浩成、香澄に目線を合わせて微笑む。
香澄、恥ずかしがって隠れる。
浩成、ウサギとクマのストラップを差し出す。
香澄、ウサギのストラップに手を伸ばす。
笑う浩成の口元だけ少しはっきりする。

浩成を見つめる香澄。

香澄M「幼心に芽生えたものだとしても、あれは立派な恋だった」

○会社までの道

プレゼントが入った紙袋を持っている香澄、会社への道を歩く。

向かいからコーヒーを持った丹波、香澄に気づいて手を振る。

香澄、手を振り返す。

香澄M「新しい恋をしても、ずっとくすぶったまま」

二人、中間地点で落ち合う。

丹波「何か買ったの？」

香澄「あっ」

香澄、咄嗟に紙袋を後ろに隠す。

丹波「ん？」

香澄、色々考えるが思いつかず。

香澄「丹波さんにです」

丹波「えっ僕！？　何かあったっけ……。（察

して)あっ、えーどうしようすごく嬉しい」
香澄「見ます？」
丹波「わー悩むなあー。気になるけど……夜にとっておきたいかなあ」
香澄「ならお預けで」
丹波「うん」
丹波、納得させるように何度も頷く。
丹波、香澄と手を繋ぐ。
驚く香澄、照れつつも手を握り返す。
幸せそうな二人。
丹波、こらえきれず、
丹波「やっぱり見てもいいかなあ」
香澄、笑う。

○会社・廊下
自販機の横のベンチに座っている二人。
丹波、包装を丁寧に剥く。
丹波、ボールペンを見て嬉しそうに笑う。
香澄、丹波の顔を見て笑顔。

香澄M「いつになったら私は、あの夢から進めるんだろう」

○展望レストラン・店内（夜）

窓の外に夜景が広がっている。

向かい合って座っている丹波と香澄。

ウエイターに料理を注文する丹波、胸ポケットに香澄がプレゼントしたボールペンをさしている。

丹波「食後はコーヒーと、彼女は紅茶で（香澄に）大丈夫？」

香澄、微笑んで頷く。

丹波「じゃ、それでお願いします」

ウエイター「かしこまりました」

ウエイター、メニューを持って下がる。

丹波、ウエイターが離れたのを確認してそわそわし始める。

香澄、丹波を見ている。

丹波「今日で三年かあ」

香澄「早いようで長いようで」

丹波「僕にとってはあっという間だったな……。今だから言えるけど一目惚れだったんだよ。そうだ、食堂でカレーうどんをぶちまけてスーツがカレーに染まった人が居るって話知ってる？」

香澄「（あー）噂は聞いたことあります」

丹波「それ僕なんだ」

香澄「えっ」

丹波、香澄の反応に思わず笑う。

○回想・会社・食堂・５年前

カレーうどんを運ぶ丹波（２４）、同僚を探して辺りを見渡す。

香澄（２３）が食堂の前を通る。

香澄にくぎ付けになる丹波、机にぶつかって派手に転ぶ。

丹波Ｍ「自分でもびっくりしたよ。気づいたらカレーうどんを頭からかぶってた」

体を起こすカレーまみれの丹波、入口を見るが、香澄はもう居ない。

丹波M「顔を見た瞬間、周りにあったはずのものが全部なくなった気がしたんだ。いや本当はカレーとかうどんとかお皿もあったけど（笑う）」

同僚たちが心配して駆け寄ってくる。

丹波、入口を見たまま。

○展望レストラン・店内（夜）

丹波「社員旅行で配属がわかってから経理課に行く用事を毎日無理やり作って通い詰めるもんだから皆にからかわれてさ。それももういい思い出だよ」

笑う丹波につられて笑う香澄。

丹波、独り言のように続ける。

丹波「こんな衝撃的に人を好きになることがあるんだって、初めて知った。何をしてても一瞬見ただけの横顔が離れなくて、記憶をなぞるような夢を何度も見て」

香澄、思い当たる節があって笑顔が消える。

丹波、香澄を見つめる。

丹波「今こうしている時間ですら、夢なんじゃないかって、時々思うんだ」

少し悲しげに微笑む丹波。

香澄、その手を優しく握る。

丹波「大袈裟だね、ごめんね」

丹波、誤魔化すように笑う。

香澄、そんなことないと首振る。

丹波「……」

丹波、香澄の手を握り返す。

丹波「今日、話したいことがあるんだ」

香澄「……はい」

緊張している丹波。

香澄、その緊張が伝わる。

ふと思い出して手を離す丹波、スーツの内ポケットからリングケースを出す。

香澄、それを見てドキッとする。

丹波、香澄の様子に気づく。

丹波「あっ違う違う。ごめんね、これはただのプレゼント。香澄ちゃんがくれたように

僕も用意してて、特別な意味はないよ。……あ、記念日だから意味はなくないけど、そういうのは、ね。また追々……。うん、追々」

丹波、リングケースを香澄の前へ。

香澄「見ても……？」

丹波「あっうん、どうぞどうぞ」

香澄、ケースを開ける。

中にはカスミソウが彫られているシンプルなシルバーの指輪。

丹波「安直かなと思ったんだけど、でもやっぱり名前に沿った方がいいかなって」

香澄「可愛いです。ありがとうございます」

丹波、ほっとして笑う。

丹波「貸して」

香澄、ケースごと丹波に渡す。

丹波、指輪を取る。

香澄、どっちの手を出そうか悩む。

丹波、香澄の右手を取って薬指に指輪をはめる。

丹波「（左手を見て）そっちはまだ、とっておいて」

香澄「……はい」

香澄、指輪を眺める。

丹波、香澄の顔をうっとり見ている。

丹波「（ついロから出て）一緒に暮らさない？」

香澄「（驚いて）……」

丹波、はっと気づく。

丹波「あ、……うん。一緒に暮らしたい。ずっと言おうと思ってた。二人の将来のことを考えてって格好よく決めたかったけど。……きっと僕は、香澄ちゃんのことを理解してるつもりでも、知らない部分がたくさんあるだろうから。ゆっくり、少しずつでいいから、二人で過ごす時間を増やしていきたい。……どう、かな？」

どう返そうか悩む香澄、テーブルの下で手をぎゅっと握る。

心を決める香澄、数回頷く。

香澄「……よろしくお願いします」

丹波「本当？　あーよかったあ……。告白する時より緊張した」

香澄、微笑む。

丹波「じゃあ、さっそく来週の休みに物件見に行かない？」

香澄「はい」

安心して饒舌になる丹波、笑顔の香澄。

料理が運ばれてくる。

○アパート・香澄の部屋（夜）

帰ってくる香澄、床にぺたんと座る。

香澄、ウサギのストラップを見る。

香澄、溜息。

香澄M「いい加減、忘れないと」

○同・部屋前（朝）

香澄、部屋から出て鍵をかける。

香澄、ウサギのストラップを見て、

香澄「……」

香澄、鍵をしまう。

○会社までの道（朝）

サラリーマンに混ざって歩く香澄。

後ろから凜が駆けてくる。

追いつく凜、香澄の背中を叩く。

凜「おっはよ」

香澄「（驚きつつ）おはよ」

凜「どうだった？」

香澄「（ああ）一緒に住もうって」

凜「あっそっち！？　そうかー、まあ丹波さんらしいっちゃらしいなあ」

笑う香澄、マフラーをいじりつつ。

香澄「そう。ゆっくり安全にって感じ」

凜、香澄の顔を見る。

凜「幸せそう。この先もういいことしかないもんね、心配事も邪魔も入らないでそのまま二人はゴールイン！　みたいな」

一人で盛り上がる凜、香澄が立ち止まったことに気づかないまま歩いて行く。

香澄、鞄を握る。

香澄「……そう、だよね」

○会社・経理課・オフィス（朝）

領収書を見る香澄の後ろ姿。

香澄M「何かが引っかかった気がした」

×　×　×

フラッシュバック。

レストランで向かいに座っている丹波、

嬉しそうに笑う。

×　×　×

電卓をたたく香澄の後ろ姿。

香澄M「幸せだと言われて、その通りだと思

ったのに」

×　×　×

フラッシュバック。

朝の通勤途中。

凛「この先いいことしかないもんね」

×　×　×

許可の判子を押す香澄の後ろ姿。

香澄M「先に待っているのは、私が望む幸せ

で……」

×　×　×

フラッシュバック。

鮮明に浮かぶ浩成の顔。

浩成「コーヒーが飲めるくらい大人に―」

×　×　×

香澄、叩きつけるように判子を押す。

はっと気づいて周りに平謝り。

○同・廊下（朝）

香澄、自販機の前に立っている。

香澄、缶コーヒーを買い、横のベンチに座る。

香澄、缶コーヒーを見ている。

香澄、覚悟を決めてプルタブに指を掛ける。

そこに通りかかる丹波。

丹波「藤野さん、おつかれ」

香澄、顔を上げる。

プルタブから香澄の指が離れる。

香澄「お疲れさまです」
丹波、缶コーヒーに気づく。
丹波「あれ？　それ」
香澄、視線を辿って、
香澄「（誤魔化すように笑う）……間違えちゃって……」
丹波「だよね。藤野さん飲めないもんね。じゃあ僕が貰おうかな、代わりに何がいい？　ココア？　紅茶？」
香澄「……ココアで」
丹波「おっけー」
丹波、ココアを買って香澄に差し出す。
香澄「ありがとうございます」
香澄、ココアを受け取る。
丹波、香澄の手からコーヒーを取る。
丹波「じゃ（去る）」
香澄、笑顔で見送る。
丹波が見えなくなった瞬間、うなだれる香澄。
香澄M「私はいつまで経ってもコーヒーを飲

むことができない」
香澄の手の中のココア。
香澄M「まるで呪いだ」

○マンション・部屋前（夜）
香澄、鞄から鍵を出す。
ウサギが鞄に引っかかって千切れる。
足元に落ちるウサギ。
香澄「（見て）……」

○同・香澄の部屋（夜）
丹波と電話している香澄、パソコンで物件サイトを見ている。
香澄「しいて言うなら職場からあまり離れたくないですね」
丹波の声「それは僕もだなあ。じゃあそれを第一条件にして、あとは間取りとか向きとかだね」
香澄「うーん、洗濯物が乾けば何でも……」
丹波の声「（笑う）じゃあ僕がいくつか見繕っ

てみるよ。不動産にお任せしてみるのも手だしね」

香澄「すみません。役に立てなくて」

丹波の声「いいよー。部屋決まったら家具見に行こうね」

香澄「はい、それは二人で行きましょう」

香澄、物件サイトから家具屋のサイトに移る。

パソコンの横にウサギのマスコット。

○香澄の夢

家も家具もない白い世界にソファーとそこに座ってゲームをしている大学生の浩成だけ。

立って見ている現在の香澄。

浩成「お前の家じゃねーんだけど」

浩成、子供の香澄と会話しているように同じ言葉を一方的に喋る。

香澄、諦めたように溜息を吐く。

香澄「(ぼそっと)もう私の意志とか関係ない

よなあ……。ほぼ強制的だもん」

浩成「何だよガキが偉そうに。コーヒー飲めるくらい大人になってから言ってくださーい」

香澄、ムッとする。

香澄「今でもコーヒー飲めないのはこうちゃんのせいだよ。この夢だってそう」

香澄、子供の香澄が座っていた場所に座る。

香澄「……ねえこうちゃん。私、今付き合ってる人が居るの。すごくいい人で優しくて、一緒に居て安心する、とても素敵な人。私はきっと、その人と結婚する。だからもう忘れたいの、ここから進みたい。……こうちゃんのことは好きだよ。たぶん、今も好き。でも―」

浩成「無理だろ」

香澄、浩成を見る。

浩成、ゲーム機から顔を上げない。

香澄「無理じゃないよ。だってこうちゃん居

ないじゃん。（ソファーを叩いて）ここに居ないじゃん！　次の日から私のこと避けてさ、何も言わないで引っ越して行っちゃったじゃん！　何で？　私何か悪いことした？　毎日家に来てしつこかった？　ゲームの邪魔だった？　言ってくれないとわかんないよ！」

ドラマの音声がはっきり聞こえる。

女子高生の声『ねえねえ、このおまじない知ってる？　好きな人が眠っている間に―』

香澄「（イラっとして）知ってるよ！　キスしたら恋を封印とかなんとかでしょ！？」

浩成、驚いた顔で香澄を見る。

香澄「え、何―」

香澄、ソファーからずり落ちる。

○アパート・香澄の部屋（朝）

香澄、ベッドから落ちて目を覚ます。

ウサギのマスコットが向かい合うよう

に落ちている。
体を起こす香澄、何が起きたか理解できていない。

○同・部屋前（朝）
丹波、チャイムを押す。
香澄、顔を出す。
丹波「お待たせ」
香澄「いえ、車ありがとうございます」
香澄、外に出て鍵を閉める。
鍵には何も付いていない。
丹波、それに気づいて、
丹波「マスコットどうしたの？」
香澄「！　……、取れちゃったんです」
丹波「直せそうならやるよ？」
香澄、悩むが首を振る。
香澄「もう古かったですし」
丹波「そう？　ならいいけど」
二人、車へ向かう。

○丹波の車・中（朝）

信号で止まる車。

香澄、思いついたように、

香澄「丹波さんが使ってないストラップとかないんですか？」

丹波「え、何どうしたの」

香澄「鍵、やっぱり不便だなって思って。あと丹波さんがくれた物をつけたいので」

丹波、嬉しさをかみしめてにやける。

丹波「えー、えーっとどうだったかな……。あ、信号見てて」

丹波、ダッシュボードを漁り、中学男子が買うようなキーホルダーを見つける。

丹波「何だこれいつのだ？　駄目だな、ろくなものないから今日の帰りどこか寄ろう」

丹波、キーホルダーをしまおうとする。

香澄、その手を止めて、

香澄「それがいいです」

丹波「香澄ちゃんには似合わないよ」

香澄、首を振る。

丹波「でもさ……」

香澄「もうそろそろ青になりますよ」

丹波「えっ」

丹波、キーホルダーを離してハンドルを握る。

横断歩道にはまだ人がいっぱい。

丹波「（え？）……香澄ちゃん？」

丹波、香澄を横目で見る。

香澄、キーホルダーを鍵に付けて満足そうに微笑む。

丹波、可愛いなと思いつつやられたという顔。

丹波「やっぱ似合わないよ」

香澄「いいんです」

○不動産屋・外観（朝）

駐車場に入ってくる丹波の車。

○同・店内（朝）

入店する丹波と香澄。

女性店員「いらっしゃいませ」

丹波「こんにちは、お電話した丹波です」

女性店員「ご来店ありがとうございます。担当呼びますのでこちら（椅子）でお待ちください」

丹波と香澄、座る。

女性店員「事前にお問い合わせいただいたお部屋の資料、置いておきますね」

女性店員、カウンターにプリントを数枚置く。

丹波と香澄、それを見ている。

丹波「とりあえず職場から近い所で探してみたんだ」

香澄、一つを指さして、

香澄「このお部屋の外観可愛いですね」

丹波「そう言うと思った」

松本（２９）「おまたせしました～。（椅子に座りつつ）担当させていただく松本です」

松本、名刺を出し、陽気に話を続ける。

松本「勤務先との距離を第一条件だそうですが、他にご希望は増えたり……」

丹波と香澄、目を合わせてお互いに「ないね」という顔。

松本「何階がいいとか、ペットを飼いたいとか、あとは部屋数など～（あれば……）」

二人とも曖昧な顔。

松本「うん、じゃあもう一回見に行っちゃいましょうか。お部屋に行ってイメージしてみましょう、ね！　車ご用意します～」

○木造アパート・１ＬＤＫ

松本「和室をリフォームした人気の角部屋ですねー」

松本、説明を続けながら窓を開けると、すぐそばに大きな木。

枝が今にも部屋に入りそう。

松本、二度見して驚く。

丹波と香澄、顔を見合わせて「ないな」と。

○木造アパート・２ＬＤＫ

松本「こちらは常設のゴミ捨て場があり（窓を開けて）木もないです。安心です」

松本が笑いかけた瞬間、隣の家から子供の叫び声が響いてくる。

松本「……（愛想笑い）」

○鉄骨マンション・１ＬＤＫ

松本「木もなく鉄骨なので静かです！」

丹波「日当たりもいいし職場からも近いね」

香澄「（……？）何か煙たい気が……」

資料を見る松本、開き直ったように、

松野「お向かいが焼肉屋ですね！」

丹波と香澄、「なしで」という顔。

松本「ですよね！」

○不動産屋・店内（夕）

カウンター越しに向かい合って座っている三人。

松本「すみません、せっかくお越しいただいたのにお力になれず……。こうなったらエリアマネージャー呼びます。安心してください、僕より断然プロなんで、もう全部任せてください！」

香澄「ありがとうございます」

丹波「こちらも色々考え直してきます」

○カフェ・店内（夕）

食事が終わった二人、飲み物を飲む。

丹波「一人暮らしじゃないから難しいね」

香澄「上手くいきませんね」

丹波「どうしようか。いろんな部屋見れてよかったけど、まだ何かぼんやりしてるというか」

香澄、少し考えて、

香澄「まず家具から考えてみません？　全部買い替えるわけじゃないなら食卓にするのはうちの低いテーブルか、丹波さんの高いのかとか。家電も、どっちのを持って行く

かも」

丹波「（なるほど）洗濯機で乾燥できるなら浴室乾燥は要らないよね」

頷く香澄、メモ帳とボールペンを取り出す。

丹波も同じくボールペンを出す。

○会社・食堂

向かい合って座っている丹波と香澄、そこに凜も加わって話し合っている。

○マンション・丹波の部屋（夜）

食卓に広げたメモ、かなり条件が追加されている。

丹波「増えたね」

香澄「増えすぎたぐらいですね」

丹波、メモをまとめながら。

丹波「まあ優先順位は決まってるから、あとはプロに任せよう」

香澄、頷く。

香澄「楽しみですね」
嬉しそうな香澄を見てにやける丹波。
丹波「職場でも家でも一緒になるね」
香澄「飽きられちゃいそう」
丹波「飽きないよ！　飽きるわけないよ。三年一緒に居ても全然、まだ足りないくらい」
笑う二人。

〇不動産屋・店内
松本「（メモを見て）おー増えましたねー。今日こそいいお部屋見つけましょうね」
丹波「お願いします」
松本「マネージャー、すぐ来るので」
松本、ニコッと笑って席を立つ。
丹波「条件出し過ぎの方がよかったのかもね」
香澄「前回は申し訳ないことしましたね」
丹波、「ね」と肩をすくめる。
香澄、条件を書いたメモに目を落とす。
浩成の声「お待たせいたしました」
香澄、声を聴いた瞬間固まる。

丹波、香澄に気づいていない。

浩成、名刺を取り出して、

浩成の声「エリアマネージャーの広尾です」

目を動かす香澄、名前を見て呼吸が乱れていく。

香澄、震える手を強く握り、ゆっくり顔を上げる。

浩成（３８）、が目の前に立っている。

目が合い、互いを認識する香澄と浩成。

浩成、一瞬固まるが、何もなかったように座る。

浩成「条件に合うおすすめの物件をいくつかご用意させていただきました」

浩成、物件をまとめたファイルを取り出す。

丹波と浩成、話を進める。

視線が下がったままの香澄、浩成を見れない。

○新築マンション・駐車場

不動産の車が止まり、浩成と丹波と香澄が出てくる。

○同・部屋

鍵を開ける浩成、スリッパを二つ置いて部屋に上がる。

浩成「南向きで防犯もしっかりしてるお部屋です」

浩成、窓を開けながら説明を続ける。

青い顔をしている香澄、耳鳴りですべてが雑音に聞こえる。

視界がゆがんで白くなっていく。

浩成「新婚さんにおすすめですよ」

丹波「（照れて）ああ、いや僕らはまだ」

丹波、香澄をちらっと見る。

香澄、資料で顔を隠している。

丹波、聞こえてなかった様子に少しほっとして、

丹波「（香澄に）いいお部屋だね」

香澄から反応がない。

丹波「？　香澄ちゃん？」

丹波、覗き込む。

香澄、顔が真っ青。

丹波「えっ大丈夫？」

浩成、香澄を見る。

浩成と目が合う前に倒れる香澄。

○アパート・香澄の部屋（夕）

香澄、ベッドで横になっている。

丹波、床に座って香澄に寄り添っている。

香澄「ごめんなさい」

丹波「謝ることなんてないよ。むしろ体調悪いのに気づけなくてごめんね」

首を振りながら布団にもぐる香澄、小さく「ごめんなさい」と繰り返す。

丹波、香澄の頭を撫でる。

丹波「僕はここに居ていい？　それとも一人になりたい？」

少し間があり。

香澄「……少し一人にさせてください」
丹波「うんわかった。何かあったら呼んで、すぐ来るから」
香澄、頷く。
丹波「鍵だけ借りるね、閉めたらポスト入れるから」
丹波、荷物と鍵を持って部屋を出る。
施錠されて、ポスト鍵が入れられる。
ゆっくり起き上がる香澄、ベッドから出て小物入れを漁る。
中からウサギのマスコットを出す。

○会社・経理課・オフィス
仕事が手に着かない香澄、一点を見つめたまま机に向かっている。
香澄、立ち上がって上司の元へ。
不思議に思う凛、香澄を目で追う。
香澄「体調がすぐれないので早退させていただいてもいいですか？」
上司「（困惑しつつ）あ、ああ。そうみたいだ

な。うん、帰っていいよ。うん」

香澄「ありがとうございます。お先に失礼します」

香澄、頭を下げて部屋を出る。

凜、「えっ」という顔。

○同・ロッカールーム

香澄、荷物を出す。

凜、ロッカールームに入ってくる。

凜「香澄」

香澄、振り返る。

凜「ねえ、どうしたの？　大丈夫？　丹波さんには言った？」

香澄「……ううん大丈夫。ごめん。急ぐから」

香澄、速足で出て行く。

凜「急ぐって……」

○不動産屋・店内

自動ドアが開く。

女性店員「いらっしゃいませー……」

入店する香澄、店内を見回す。

香澄「広尾さん居ますか？」

女性店員「えっと……広尾は今出てまして……」

香澄「わかりました。待たせていただいてもいいですか？」

女性店員「……かしこまりました。お飲み物用意しますね。何がよろしいですか？」

香澄「あ、コーヒーを」

女性店員「お持ちします」

○同・スタッフルーム

女性店員、コーヒーのドリッパーを出す。

裏口から浩成が入ってくる。

浩成「戻りましたー」

女性店員「あ、広尾さん。お客様がいらっしゃってます」

浩成「え？」

浩成、店の中を見る。

カウンターで待つ香澄。
浩成、一瞬顔が険しくなる。
浩成「……」
浩成、コーヒーに気づく。
浩成「それ、俺がやります」
女性店員「え？　あ、はい」

○同・店内
俯いている香澄。
浩成「お待たせしました」
香澄、顔を上げる。
浩成、緑茶が入った湯呑を置く。
香澄、緑茶を見て不満な顔。
浩成「今日はお連れ様は一緒じゃないんですね」
香澄「……一人暮らしの部屋を探しに」
浩成「……かしこまりました」
浩成、パソコンを見る。
浩成「ご希望の地域はありますか？」
香澄「この辺りの１ＬＤＫで」

香澄、緑茶を飲む。

浩成、いくつかピックアップして印刷。

それを机の上に並べる。

浩成「この近くで１ＬＤＫだと一階のお部屋しか空いてませんね。防犯上避けられる方が多いですが―」

香澄、適当に指さす。

香澄「ここ見せてください」

浩成「……。オーナーさんに聞いてみますのでお待ちください」

浩成、電話を掛ける。

香澄、緑茶を飲んで待つ。

浩成、電話を切って。

浩成「車用意します」

浩成、外へ。

香澄、あとに続く。

○同・外

浩成、鍵を開けて助手席のドアを開ける。

香澄、車に乗り込む。
浩成、ドアを閉めて運転席に乗る。

○走る車・中
無言の二人。

○アパート・１ＬＤＫ
鍵を開けて電気を点ける浩成、スリッパを置いて部屋に上がる。

浩成「西向きで駅まで歩いて十分ぐらいかかりますが大通りなので夜も明るいかと。窓は防犯ガラスになってるので―」

香澄「こうちゃん」

浩成「……」
浩成、香澄に背を向けたまま資料をめくる。
香澄、泣きそうになりながら、

香澄「こうちゃんでしょ？」
浩成、溜息を吐いてファイルを閉じる。

浩成「止めてくんない？　こういうの。職場

に来られたら追い返すわけにもいかねーだろ」

香澄「……ごめん。こんな方法しか思いつかなくて」

浩成「で、何？」

香澄「……」

浩成「何の用」

香澄「……こうちゃん変わったね」

浩成「そりゃ歳重ねりゃ―」

香澄「どうして顔見てくれないの？　この前も今日もずっと、私の顔を一回も見てくれてない。昔は目線合わせてくれた。絶対に、どんな時でも」

浩成、めんどくさそうに香澄の顔を見る。

浩成「これでいい？」

香澄「……睨まないでよ。そんな顔、昔はしなかった」

浩成「昔、昔って、お前は思い出話しに来たの？」

香澄「……」

浩成「俺の仕事の邪魔までして、のんきなもんだな。少しぐらい成長してると思ってたけど、何も変わってない」

香澄「こうちゃんのせいでしょ」

浩成「は？」

香澄、零れるように、

香澄「忘れようと思った。こうちゃんが好きな気持ちも思い出も全部、何度も忘れようとした。なのに……夢を見るの。毎日同じ、こうちゃんの夢を。そのたびに気持ちが引き戻される。好きな気持ちを全部持ってかれるの。忘れたいのに、私はずっとあの日から動けない」

浩成「……年上に憧れる時期ってあるだろ。俺と一緒に居たのがちょうどその頃で、思い出が美化されてるだけだよ。お前のはそういうやつだよ」

香澄、ウサギのマスコットを鞄から取り出す。

香澄「今も好きだよ」
浩成「そんなもの今すぐ捨てろ」
浩成、奪おうとする。
香澄「（避けて）やだ！」
浩成「付き合ってる人が居んだろ」
香澄「！」
浩成「いい人そうじゃん。お前のことを一番に考えて、俺とは大違いだよ」
俯く香澄、ウサギを握りしめる。
その姿を見る浩成、深呼吸をして、
浩成「俺はお前のことが好きじゃない。一回も、そう思ったことはない」
涙を浮かべる香澄、絞り出すように、
香澄「じゃあ……何で―」

○回想の広尾家と現在のアパート・点描
１７年前の広尾家の記憶。
ソファーに座っている子供の香澄と大学生の浩成。
テレビでドラマが流れている。

女子高生の声『好きな人が眠っている間にキスをして、気づかれなかったらその恋心を封印できるんだって～』

×　×　×

香澄「どうしてあの時……」

×　×　×

眠っている子供の香澄。

×　×　×

香澄、耐えきれず涙を零す。

香澄「キスなんてしたの……？」

×　×　×

大学生の浩成、子供の香澄にキスをする。

○アパート・１ＬＤＫ

部屋に風が吹き込む。

浩成「……お前、起きて―」

香澄、浩成にしがみつく。

香澄「ねえ何で？　好きじゃないんでしょ？　私のこと、一回も好きだって思ったことが

ないんでしょ？　ならどうして？　テレビから聞こえてたことと違う……おかしいじゃん」

浩成「（動揺して）……」

香澄「あんなことされて忘れられるわけないよ。好きなのに、理由も何も言ってくれないまま居なくなって……。ずるい、こうちゃんはずるい。……返してよ、好きを返して、私の好きな気持ちを返して！　できないなら全部持って行ってよ……」

香澄、涙を流す。

浩成、香澄の指輪を見る。

浩成「婚約者が居るやつに何を言えってんだよ……」

香澄、指輪を外しながら、

香澄「こうちゃんがいい！　何も要らない。こうちゃんさえ居てくれたら、それだけで……」

勢いよく指から抜ける指輪、床に落ちて転がる。

浩成、それを目で追う。
指輪が壁に当たって倒れる。
浩成、指輪を見ている。
浩成「……成人した男が十も下の小学生が好きだなんて言ったら、どうなるかわかるだろ」
香澄「十しか違わないじゃん」
浩成「十も違うんだよ！　（弱弱しく首を振る）お前にはわからない。一生わからないよ。周りの皆が同年代の恋人作ってんのに俺はいつまでもお前を見てて……。ああ、俺は普通じゃないんだって、あの日気づいたんだよ」

○回想・広尾家・リビング（１７年前）
浩成、眠っている香澄をゲーム機越しに見る。
浩成、香澄の前で手を振って寝てるかどうか確認。
起きない香澄。

浩成、ゲーム機を置いてそっと近づく。
あと数ミリで口が重なる。

○アパート・１ＬＤＫ

香澄「……私、もう小さな子供じゃないよ」
浩成「俺からしたら二十八なんて子供だよ」
香澄「二年後には三十だよ」
浩成「俺だって四十だよ。その差は絶対に埋まらない」
香澄、ウサギに縋る。
香澄「……こうちゃんと一緒に居たい」
浩成「無理だよ」
香澄「全部捨てたとしても？」
浩成「お前の言ってる全部って何、家？　友だち？　仕事？　違うだろ、親もだろ。親族全員、知り合いも含めてお前と俺を知ってる人との縁を全部切る覚悟あんのかよ。お前だけじゃない、それを俺にも背負わせんだよ、わかってんのかよ」
何も言えない香澄、静かに泣く。

○不動産屋・外から通り（夕）

香澄、背を向けて歩いていく。

香澄の後ろ姿を見ている浩成、店に戻る。

しばらく歩いていると香澄の携帯に丹波から着信。

香澄「（出る）はい」

丹波の声「あ、香澄ちゃん大丈夫？　早退したって聞いたんだけど」

香澄「……丹波さん……」

丹波の声「うん？」

香澄、泣きそうになるのを懸命に我慢して、

香澄「……今から、お家行っていいですか？」

丹波の声「んっ？　うん、いいよ。いいけど、体調悪いなら僕が香澄ちゃんの家行くよ？」

香澄、首を振る。

香澄「丹波さんがいいです。……丹波さんの家がいいです」

丹波の声「そっか、わかった。今どこ？　外だよね。迎えに行くよ」

香澄「……」

涙が零れる香澄、笑ってごまかす。

○マンション・丹波の部屋（夜）

丹波、空になった食器をキッチンへ運ぶ。

丹波「ごめんね、ろくなものなくて」

香澄「（首を振る）美味しかったです」

香澄、同じく食器を運ぶ。

キッチンで洗い物をする二人。

丹波「元気になってよかった」

香澄、目を伏せて、

香澄「ありがとうございます。もう大丈夫です」

丹波「あ、そういえば、不動産の担当さん知り合いだったんだね」

手が止まる香澄、動揺する。

香澄「……え」

丹波「香澄ちゃんが体調崩しちゃったときに
ね」

○回想・病院・治療室

香澄、ベッドに寝かされて点滴を受け
ている。

丹波、治療室を出る。

○回想・同・廊下

深刻な表情で俯いている浩成、戸が開
いたことに気づき、顔を上げる。

出てくる丹波、浩成の元へ。

丹波「軽い貧血だそうです。すみません、病
院まで連れて来ていただいて」

浩成、ほっと息を吐く。

浩成「いえ、気になさらないでください」

丹波「……回復したらまた改めて―」

浩成「先に籍入れてしまった方がいいんじゃ
ないですか？」

丹波「（えっ）」

浩成「手続きも一気に済みますし」

丹波「え？　あー……そう、ですかね……。（悩む）でも、そんな焦るようなことじゃないかと思ってまして。なにより彼女がまだそれを望んでいないのがわかるんです」

丹波、病室を見ている。

浩成、丹波の横顔を見て、病室を見る。

浩成「……なら、絶対に手を離したりしないでくださいね」

丹波「（え、何？）」

浩成「嘘を吐く時、必ず目を伏せるんです。後ろめたさかわかりませんけど、その時だけ絶対顔を見ないんです。くだらない嘘なら流してくれていいんですけど、体調悪くても平気だって笑うようなやつなんで、それだけ覚えておいてください。特に今の寒い時期は苦手なので」

丹波、浩成が怪しく思える。

浩成「あと、コーヒーは絶対飲ませないでください」

丹波、少し考えて思い当たる節があり、

丹波「……知り合いなんですか？」

浩成、笑うがどこか悲し気。

浩成「昔、近所に住んでただけです」

○マンション・丹波の部屋（夜）

丹波「ずっと香澄ちゃんの心配をしてたよ。春先まで温かい格好させた方がいいとか、レモンが苦手だからホットレモンよりココアがいいとか。あ、あとチョコレートのことも。ロイズのポテトチップスチョコ、買いに行こうね。今、北海道物産展やってるとこがあるんだってー」

香澄の震える手からお皿が滑り落ちる。床に当たり、割れて飛び散るお皿。

丹波「わっ大丈夫？　怪我してない？」

真っ先に香澄の手を見る丹波。

香澄「ごめんなさい……」

丹波「香澄ちゃんが何ともないならいいよ」

丹波、お皿の残骸を片し始める。

香澄「……ごめんなさい」
丹波「なあにーどうしたのー」
泣き出す香澄、顔を覆う。
香澄「……ごめん、なさい」
丹波、顔を上げる。
丹波「えっ（立つ）どうしたの！？　何でもないお皿だから気にしなくていいよ。それかどこか痛い？　割れた時に破片飛んできた？」
香澄「（首を振り）ごめんなさい、ごめんなさい丹波さん」
香澄、泣き続ける。
丹波、どうしたらわからない。
○マンション・浩成の部屋・リビング（夜）
一人暮らしにしては広い２ＬＤＫ。
テレビの前のローテーブルに置かれた携帯に着信。
浩成、電話に出てソファーに座る。
浩成「はい？」

同級生の声「あっ出た出た」

浩成、テーブルの上に溜まった郵便物を見つつ、

浩成「どうした？」

同級生の声「どうしたじゃねーよ。同窓会、返事ないのお前だけだよ」

浩成、案内のはがきを見つける。

浩成「あー……（忘れてた）」

同級生の声「どうする？　やっぱ忙しい？」

浩成、はがきを読む。

浩成「……いや、行く。ちょうど休みだし」

同級生の声「マジ？　珍しっ（周りにいる友人に）浩成来るってー」

浩成、電話越しに盛り上がる声が聞こえて笑う。

同級生の声「おっけ、幹事に伝えとくわ」

浩成「よろしく」

浩成、電話を切る。

浩成、携帯を置いて天を仰ぐ。

浩成「（ぼそっと）切れるわけないんだよ」

○マンション・丹波の部屋（夜）

向かい合って立っている二人、顔はお互い俯いている。

香澄、何も言わず荷物をまとめて部屋を出て行く。

○同・エントランスから前の通り（夜）

マンションから出てくる香澄、浮かんだ涙を拭い、まっすぐ前を見て歩いて行く。

○会社・経理課・オフィス（朝）

香澄、机の上の荷物を片付けている。

周りが香澄のことをちらちら見ている。

香澄、荷物をまとめ終えて、

香澄「お世話になりました」

香澄、一礼して出て行く。

凜、去っていく香澄の背中を見て我慢できずに立ち上がる。

○同・廊下（朝）

走ってくる凜。

凜「香澄！」

香澄、振り返らない。

香澄に追いつく凜、腕をつかむ。

凜「ねえ！」

香澄、足を止める。

凜「仕事辞めるって何？」

香澄、凜を見ないで俯く。

凜「……何か言ってよ。相談してよ、友だちじゃん。悩みとかあるなら聞くから、全部聞くから」

香澄「（言えなくて）……」

凜「香澄」

香澄「……好きな人が居るの」

凜「丹波さんでしょ？」

香澄、首を振る。

凜、「何？」と顔をしかめる。

香澄「違う、違うの……」

凜、香澄から手を離す。

凜「ねえ、この前からおかしいよ。丹波さんと一緒に住むって言ってたじゃん。なのに、好きな人って何？　どういうこと？　仕事辞めてまでその人と一緒に居たいの？　変だよ。全部めちゃくちゃにして、それで幸せになれるわけないじゃん」

香澄、凜を真っ直ぐ見る。

香澄「一緒に居られるなら死んだっていい」

凜、香澄の真剣な顔に驚く。

香澄「それくらい好きなの」

香澄、凜に背を向けて歩き出す。

残される凜、ふと思いついたように、

凜「……丹波さん。そうだ丹波さん……」

凜、来た道を戻る。

×　×　×

会議室から出てくる丹波。

凜、丹波を見つけて、

凜「丹波さん！」

丹波、凜に気づくが背を向ける。

凜、丹波の腕を掴んで止める。
振り返る丹羽、やつれて覇気がない。
凜、顔に驚きつつも強い口調で、
凜「香澄を追ってください。あの子おかしくなってる。仕事辞めるなんて言って―」
丹波「ごめんね、出来ないんだ」
丹波、「離して」と腕を動かす。
凜「仕事を優先してる場合じゃないですよ！」
丹波「そうじゃなくて―」
凜「じゃあ何ですか！」
丹波「別れたんだ」
凜、理解できない。
凜「……え？」
丹波「そういうことだから」
丹波、凜の腕を外そうとする。
凜、より強く握る。
凜「何でですか！？　香澄のこと好きなんですよね」
丹波「……好きだよ」
凜「なら！」

丹波「好きだからこそ、僕じゃ幸せにできないってわかっちゃったんだよ」

凜、腕をつかむ力が弱まる。

丹波、去っていく。

取り残される凜、佇む。

凜「死んでもいいくらい好きだなんて、幸せなわけないじゃん……」

○アパート・香澄の部屋

香澄、家具が無くなって空っぽになった部屋に立っている。

香澄、浩成の名刺を取り出して携帯に番号を打ち込む。

○居酒屋・前（夕）

同窓会の集まりに加わる浩成、懐かしい顔に笑顔で喋る。

浩成の携帯にメッセージが届く。

浩成、見る。

知らない番号から【ごめんなさい】と

メッセージ。
同級生たちが居酒屋へ入っていく。
浩成、携帯を見たまま動けない。
同級生「何してんの？　電話？」
我に返る浩成、誤魔化す様に笑って、
浩成「……いや？」
浩成、携帯をしまって店内へ。

○駅・ロータリー（夕）
立っている香澄、寒そうに手を擦り合わせる。

○居酒屋・店内（夕）
飲み物を注文する同級生。
盛り上がっている中でどこか上の空な浩成。
同級生「浩成、何にする？」
浩成「（はっとして）ん？　ああ、（メニューを貰って）えっと……」

○駅・ロータリー（夜）

ベンチに座っている香澄、俯いている。

通行人が香澄の前を通りすぎていく。

香澄の目の前を足（浩成）が通り過ぎる。

香澄、小さく溜息。

浩成、自販機で缶コーヒーを買う。

自販機をちらっと見る香澄、顔を上げて向かいにあるコーヒーショップを見る。

店の外まで若いカップルが列を作っている。

浩成、香澄と距離をあけてベンチにどかっと座る。

香澄、怪訝そうな顔で横を見る。

浩成、缶を開ける。

驚く香澄。

浩成、コーヒーを半分まで飲み、ベンチの中央に置く。

香澄、浩成から缶コーヒーへゆっくり

視線を落とす。
缶に手を伸ばす香澄、苦味に顔をゆがませながらコーヒーを飲む。
香澄、空の缶をベンチの中央に置く。
浩成、立ち上がって缶を捨て、車に向かう。
香澄、荷物を持って追う。

○浩成の車・中（夜）
運転する浩成。
助手席に香澄。
浩成の家の鍵についているクマのマスコットが振動で揺れている。

○マンション・浩成の部屋・玄関（夜）
家に上がる浩成、その後に続く香澄。

○同・リビング（夜）
浩成、上着を脱いでハンガーにかける。
香澄、部屋の隅に立っている。

浩成、暖房をつけて風呂場へ。
香澄、上着を脱ぐ。
戻ってくる浩成、寝室へ行きスウェットを持って来る。
浩成の携帯に電話がかかってくる。
浩成「（出る）はい、お疲れさまです」
浩成、スウェットを香澄の前に落として仕事部屋へ。
見送る香澄。
リビングに「お風呂が沸きました」とアナウンスが流れる。
香澄、スウェットを見る。
香澄「……」
香澄、スウェットを持って風呂場へ。

○同・風呂場（夜）
湯船に浸かっている香澄、浴槽の淵に頭をもたれて目をつぶる。

○同・仕事部屋（夜）

浩成、電話をしながらパソコンで作業している。

○同・リビング（夜）

スウェット姿の香澄、風呂場から出てくる。

ソファーの上にドライヤーが置いてある。

香澄、髪を乾かす。

浩成、電話をしながらやってくる。

香澄、ドライヤーを止める。

浩成、キッチンでココアを淹れる。

香澄、ドライヤーのコードをいじる。

浩成、香澄の前にマグカップを置いて寝室へ。

香澄、ココアを見る。

浩成、毛布を香澄に向かって投げる。

驚く香澄、浩成を見る。

浩成、テレビをつけて仕事部屋へ。

見送る香澄、ドライヤーをつける。

新品の歯ブラシが廊下から滑ってきて
香澄の足元へ。
香澄「……」

○同・仕事部屋（夜）
浩成「はい、はい。お疲れさまでしたー」
電話を切る浩成、溜息を吐いて体を伸ばす。
浩成、パソコンの電源を落として部屋を出る。

○同リビング（夜）
つけっぱなしのテレビ、情報番組が流れている。
毛布にくるまっている香澄、ソファーでうたた寝している。
男性アナウンサー『リメイクされると発表されてから話題になってるドラマですが』
スウェットに着替えた風呂上りの浩成、リビングにやってくる。

モデル『当時見てましたよー、このドラマ。特におまじないのシーン！　あれ切なすぎませんー！？』

浩成、ソファーの端に座る。

俳優『封印って何〜！？　って世間が騒ぎましたよね！　実際やった子もいるんじゃない？』

浩成、香澄を見る。

モデル『やりましたやりました』

浩成、香澄に手を伸ばす。

俳優『で、で、その後でわかるおまじないの続きが！』

浩成、手が止まる。

モデル『相手が起きて失敗した場合のことですよね！』

俳優『一生その恋から逃れられなくなるって〜！』

浩成、テレビを見る。

モデル『それそれ！　めちゃくちゃ怖いー！』

俳優『恋のおまじないなのに！』

コメンテーター『（笑いながら）恋のおまじないなんて可愛く言いますけど、結局呪いと一緒ですからね』

モデル『えー夢がなーい』

コメンテーター『夢も何も、その二つは読み方が違うだけなんですよ。人を思う行動が元になっているわけですから、根本的には同じものです』

咄嗟にテレビを消す浩成、後悔がこみ上げる。

香澄、目を覚ます。

浩成、リモコンを置いて逃げるように寝室へ。

香澄、目で追う。

開けっ放しの寝室の扉。

香澄、寝室へ。

○同・寝室（夜）

浩成、ベッドに入る。

右側が広く空いている。

香澄、右側からベッドに入る。
浩成、リモコンで電気を消す。
背を向けている二人。
香澄、浩成の背中を見る。
浩成、動かない。
寝返りを打つ香澄、ゆっくり浩成との距離を詰める。
香澄、浩成の背中にくっつく。
香澄「……ごめんね」
香澄、涙がこみ上げる。
香澄「……好きで、どうしても忘れられなくて……ごめんなさい」
浩成、寝返りを打って香澄を抱きしめる。
驚く香澄、浩成の腕の中で静かに泣く。
何も言わない浩成、腹をくくったような顔。
浩成、ゆっくりと目をつぶり、布団をかけ直す。

終わり